
生えてきたのは神様（候補）でした 4

国高ユウチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生えてきたのは神様（候補）でした⁴

【NNコード】

N2412P

【作者名】

国高コウチ

【あらすじ】

生えてきたのは神様（候補）でしたの続きです。

「うえ、うえええええ！」

「泣くな！泣くなって言つてんだる！」

明るい黄色の花をしあしおと萎れさせピービーと泣く男の子の前で、顔を真っ赤にして自分も泣きそうに訴えるオレンジ色の花を咲かせる男の子。

緩い癖毛を泣くたびに揺らす彼はメランポジウムそっくりの花のラージュで、その前で怒鳴っているのはマツバボタンを興奮で満開にさせているマーぼーだ。

涙で目を真っ赤にさせているラージュは元より、必死で歯を食いしばるマーぼーも目が潤んでいる。
むしろマーぼーの方が涙を堪えるのに必死で、顔がより赤いかもしれない。

何が原因で喧嘩をしたかしれないが、彼ら二人が喧嘩するなど珍しい。

生えてきた神様候補の中でもラージュの性格は飛びぬけて穏やかで、普段からおつとりと笑っていることが覆い。

ヒナとお揃いの格好をしたがる彼は、今日も色違いのTシャツとオーバーオールを着ている。

大人しい彼はいつだって元気よく遊びまわるみんなの後を追いかける末っ子気質で、外で遊ぶよりも本を読んでゆつたりと過ごすこと多かつた。

反してふるふると唇を震わせて涙を堪えるマーぼーは、活発を絵に

描いたような男の子だ。

いつだって元気一杯で、悪戯といえば彼とヒナ、そしてアールの手によりなされる。

五人の中で一番運動神経が良く、大人しくしているのが苦手な元気っ子で、喜怒哀楽もハッキリした性格だった。

一見するとラージュとマーぼーは正反対の性格をしているが、意外と相性がいい。

大抵はヒナも含めて三人で遊んでいるが、二人でもアールとピースのように喧々囂々とやりあうことはない。

大人しい気質のラージュを、弟のようと思つているらしいマーぼーが手を引いて遊ぶ。

そんな関係が確立しているだけに、物珍しい光景に麻耶はうっかりと仲裁も忘れ見物してしまっている。

「マーぼーの馬鹿！僕、マヤにあげようと思つて作ったのに」「俺だつて、もっとよくしようとして手伝つただけじゃんか！」「手伝つて欲しいなんて僕言つてない！」

「でも、俺は手伝いたかったの！俺もマヤにあげたかったの！」

「だったら自分で作ればいいじゃない！僕、……折角、お花綺麗に編みこんで……つ、ひとつ、う、……うえ！」

「泣くなつてば！ラージュの馬鹿！」

「馬鹿は、マーぼーおつー返してよーマヤのプレゼント、返してー！」

嗚咽交じりの罵り合いになるほど、と麻耶は頷いた。

どうやらラージュが麻耶宛に花冠を作ろうとせつせと花を編んでいた。

たところ、手伝おうとしたマークボーリーにより壊滅状態に陥ったらしい。豪快な性格のマークボーリーのことだ。繊細な作業をするラージュに良かれと思いしたところ、盛大に崩してしまったのだろう。

呆気なく想像できる光景に、腕を組み頷く。

状況を整理していく麻耶を置いて、彼ら一人の喧嘩は継続していた。

「大体、『僕が』マヤにプレゼントするのに、どうしてマークボーリーが手伝うの？僕は、僕一人あげたいの！」
「どうして俺が手伝っちゃ駄目なんだよ！俺もマヤにプレゼントしたいんだ！」

「自分でやつてよ！僕の邪魔しないで！」

「だつて俺一人だと、出来ないだろ！頑張ったけど、全部駄目で、お前に返そうとやつた分も、全部ぼろぼろで、だから、俺・・・」

ぐっと唇を噛んだマークボーリーの瞳から、ついに堪えきれなくなったらしい涙がぽたぽたと流れた。
その光景にラージュは瞳を丸くし、そしてマークボーリーが持つくしゃくしゃの花に視線を送る。

きっと怒りで見えてなかつたのだろうが、始めからマークボーリーはいくつもの茎がくしゃくしゃに絡み合つ冠もどきを持っていた。
泣き始めたマークボーリーにどうすればいいのかと視線をきょろきょろと彷徨わせ、結局どうすればいいのか判らなかつたのか声を詰まらせてラージュも泣き出す。

「『めんねえ・・・一杯怒つて』『めんねえ』

「お、俺も、お前の壊して、ごめん……」

うつぐ、ひつぐと涙を零して抱き合つて一人に、麻耶は破顔した。
なんて可愛くて愛しい子供達だろう。

自我を通すだけでなく、悪いことは御免と謝れて一緒に涙を零すなんて。

しかもその要因は自分へのプレゼントだと知り、麻耶の心に温かいものがいっぱい溜まつていく。

ほこり、と優しい感情が生まれ、無性に彼らを愛しみたい。

「二人とも

「・・・つ

「ママ

「私、花冠が欲しいんだけど、作るの手伝ってくれる?三人で一緒に作ればきっと綺麗なのが出来ると思つんだ」

慌てて涙を隠す二人に、何も気付いていない顔で微笑む。

麻耶の提案を聞いた子供達は、俯かせた顔を慌ててあげると皿をまん丸にして見上げてきた。

「一緒に?」

「俺たちで?」

「そう!三人で作ったら、きっと凄いのが出来上がるよ!それで、ヒナやアールやピースに見せてあげよう」

「ひつ」

掌を差し出ししゃがみ込めば、おずおずと手を繋いで乗った彼らは、じょじょに表情を緩ませた。

「うん！僕たち、一緒に作る！」

「そんで、他の奴らにも出来たの見せてやるんだ！」

「三人で頑張ると、綺麗なのが出来るよね？」

「すっごく大きいのが出来るよな？」

泣いたカラスがもつ笑つたとばかりに、きりきりと瞳を輝かせる子供達に瞳を細める。

繋いだ手をぶんぶんと振り回し、嬉しそうに声を上げる子供達の頭を順に指先で撫でた。

「出来るよ、綺麗で大きなやつが。三人で力を合わせたら、一人よりもうんと凄いのが出来ちゃうんだからー！」

「ひとつと宣言すれば、きやあっと嬉しそうに悲鳴を上げた。

今日もぽかぽか陽気な一日。

全部で6つ作つた花冠は、花を咲かせた子供達の頭で可愛らしく揺れている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2412p/>

生えてきたのは神様（候補）でした4

2011年8月21日14時58分発行